
ある日の話

愛田美月

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ある日の話

【Nコード】

N0591E

【作者名】

愛田美月

【あらすじ】

大学生の女性たちが、ある暑い日に見かけた少年の話（第一話女子学生たちのある日）***不動産屋を経営している澤田の前に現れたのは……（第二話不動産屋のある日）***お暇潰しにどうぞ。余り深く考えずにご覧下さいませ（作者注）

第一話 女子学生達のある日

来週には夏休みに入るという土曜日。この日は、八月を思わせるような暑さになっていた。三十度を越える暑さから逃れるように入った駅前の喫茶店で、オレンジジュースを飲んでいた亜里沙は、ふいに声をあげる。

「ねえ、あそこ、あの子見て」

窓越しに外を指差した。亜里沙の座っている席からは、駅前の噴水広場が良く見える。

おおきな噴水は涼しげに見えるが、実際あの場所に立てば見た目ほど涼しくはないだろう。周りにいる人々が汗を拭う姿が目映る。待ち合わせ場所として使われる事が多いせいか、この暑さの中でも多くの人が噴水の周りに立っていた。

亜里沙と一緒に席を囲んでいた大学の友人である美香と玲子が、亜里沙の指差した方向を見る。

「何よ、亜理紗。誰か知り合いでもいたわけ」

話しを途中で遮られた美香が、口を尖らせる。だが亜里沙はそんな友人に気づかず、視線を外へ向けたまま口を開いた。

「そうじゃなくて、良く見てよ、美香。あそこ、あの噴水の前で立つてる男の子。可愛くなあい？」

言われて、美香は目を眇める様にして、もう一度その方向に目を向ける。

確かに男の子が一人立っていた。背はそれ程高くなく、白い半そでシャツに黒つばいズボンをはいている。何処かの学校の制服のようだ。鞆も学校指定の物らしい。それを足元に置いて、少年は辺りをきよるきよると見回している。

その顔は亜里沙の言ったとおり、可愛いと形容したくなるものだった。

少し小さめの顔に大きな目が印象的だ。そのくせ、何処か精悍な

印象も受ける。不思議な感じの顔立ちだった。

美香の横で、チョコレートパフェを食べていた玲子が声をあげた。

「おお、本当。可愛いじゃん」

「でしょ、でしょう」

「確かに可愛いわ。将来有望だね。コレは」

美香も同意する。

亜里沙が、その少年を見つめながら口を開いた。

「誰か待ってるのかなあ」

「彼女とか？」

「えー、いやーん」

玲子の言葉に、亜里沙はぶるぶると頭を振る。

それを見ていた美香が、冷静な眼差しを亜里沙に向けた。

「でも、それが一番自然じゃない？ 絶対モテそうだもん。彼」

「うーん。確かに」

「えー、他の子に取られるなんてもったいなあい。でも仕方ないか

あ。あの子中学生位かな、大人の女に興味ないかしら」

「アンタ。あの子に手を出したら犯罪だからね」

本気で口説きに行きそうな亜里沙に、美香が釘を刺す。

亜里沙は頬を膨らませた。

「しないわよお。失礼ね」

「わっかんないよー。アンタは」

「あー、もう。酷い」

亜里沙は前に座る二人を軽く睨む。

そのとき、美香が声をあげた。

「あ、待ち人来たみたいよ」

先ほどまで、所在無さげに立っていた少年は、駅の方角へ身体を向け、駅から出てくる人々へ向かって手を振っている。

女性たちはその少年が手を振っている相手を見ようと、そちらに目を向けた。

そして、驚いた。

手を振り返している人がいた。

それは少年と同じ年頃の男の子だった。待ち合わせの相手は恋人ではなかったようだ。彼女達の予想は外れていたらしい。だが、彼女達はそんなことで驚いたわけではなかった。

その相手の少年は、黒のTEEシャツにジーパン姿だった。だがそれ以外は、待っていた少年とそっくりだったのだ。

噴水の前で立っていた制服姿の少年に、同じ顔の少年が駆け寄って、何か言っている。

「信じられない」

「可愛い顔が二つ……ダブルでお得」

「アンタの驚きはそっちかい」

美香は、亜里沙の呟きに、呆れた声でつつこんだ。

玲子は興奮した声で、手を上下に動かして二人の注意を引いた。

「うわぁ、見た？ 双子かなぁ、そっくりだね」

「だろうね。双子以外には考えらんないね」

「本当。いい男がふたり。最高じゃないのぉ」

「アンタって……」

玲子と美香は亜里沙を見ながら異口同音に呟いた。

しばらくそのそっくりな男の子達を眺めていた亜里沙達は、あることに気づいた。

どうやら、あの男の子達はまだ誰かを待っているらしい。二人がおち合ってもう既に五分以上経っている。それなのに、二人は真夏のように熱い太陽に晒されていても、影のある場所に移ろうとしなかった。先ほどと変わらずそこに立って、なにやら談笑している。

「今度こそ彼女じゃない？」

玲子はそう言って、チョコレートパフェの、最後の一口を口に含んだ。

「ダブルデートってやつか。中坊の癖に生意気な」

「えー、超うらやましい」

「あのねえ……」

異口同音にそう言って、美香と玲子はあきれ顔を亜里沙に向けた。その時である。少年の一人、制服を着たほうの少年が手を振った。今度も駅の方で、駅から出てきた人の中に手を振り返す人間がいた。

「……」

「……」

「……」

その人物は短い黒髪だった。眼鏡をかけていた。青いシャツを着ていた。そしてそれ以外は、待っている二人の少年とそっくりだった。

彼は待っている二人の少年の前に立った。

「……信じられない」

玲子が呟いた。

「三つ子とは思わなかった」

なぜか悔しそうに美香がテーブルを叩く。

そして、亜里沙が口を開いた。眼はうつとりと少年達に向いている。

「本当、可愛い顔が三つも……、超最高じゃないのぉ」

「……アンタって……」

玲子と美香は心底呆れた目を亜里沙に向けた。

「悪い。遅くなった」

待たせていた相手に謝って、安倍空あへくうは額の汗を手の甲で拭った。

「全く、遅いつつーの。俺この暑い中、三十分もここで待ってたんだからな」

一人制服姿の安倍陸あへりくが唇を尖らせた。彼の腕時計は待ち合わせの一時を、三十二分過ぎていた。その横で安倍海あへかいが近くの喫茶店に視線を向けた。

「そうそう。俺たち見世物状態だったんだぜ」

その言葉に、熱で曇った眼鏡を外して、空は怪訝な顔をする。

「は？」

「そう、あそこで座ってる三人のお姉さま方に観察されてたんだ。俺たち」

陸は顎で方向を示した。空は拭き終えた眼鏡をかけてそちらを見る。

ガラス越しに大学生風の女性三人がこちらに顔を向けていた。

女性達は空達が急にそちらの方を向いたのであたふたしている。

「あ、焦ってる」

陸は面白がるように声をあげて、その女性たちに手を振った。

「さ、行こうか。目的地に付く頃にはちょうどいい時刻になってる」
陸の声を合図に、三人は歩き出した。

いきなり手を振られて、女性たちは驚いた。見ていたのをどうやら少年達は気づいていたらしい。

制服を着た少年がこちらに手を振っている。慌てる美香と玲子を他所に、亜里沙は嬉しそうに手を振りかえた。

「いやーん、可愛い。やっぱいいな、可愛い男の子って」

「……アンタねえ」

玲子と美香はその後の言葉が続かず、呆れ果てた顔で、肩を顰めあつた。

第二話 不動産屋のある日

駅前の繁華街の中を同じ顔をした三人の少年は歩いていった。真上を過ぎた太陽が、三人に容赦ない日差しを浴びせていた。

行きかう人々の中に、日傘を差す女性の姿が多く見受けられる。

三人のうちの一人、制服を着た安倍陸あべりくはシャツの胸元を掴んで仰ぐようにしながら、口を開く。

「暑いな」

「夏だからな」

汗をかいてはいるが涼しい顔で、眼鏡をかけた安倍空あへくうは陸に答えた。

「なあ、やめようぜ。暑いって言ったら余計暑くなる。他の話しよう」

ティーシャツ姿の安倍海あへかいが言った。

「さっきの女の人たち、僕たちを見てどんな話してたんだ？ 陸」

海の言葉を受けて、空は話題を変える様に陸に話を向ける。陸は一瞬考えるように黙ってから、口を開いた。

「えーと、可愛いだとか、将来有望だとか、彼女を待ってるんじゃないかとか。三つ子とは思わなかったとか、そんなとこ」

「ふーん」

空の気の無い返事に、陸は眉を顰めた。

「何だよ。聞いたいてそれかよ」

「いや、想像通りだったもんで」

「ああそう」

腹を立てたようにそう言い捨てた陸に、海がとりなすように笑顔を見せる。

「まあまあ。久しぶりに会ったんだから仲良くやろうぜ」

彼ら三人が会うのは今日ではば一月ぶりになる。両親が死んでからこの五年の間、彼らは別々の施設で生活していた。

今日は彼らの新しい後見人に、彼ら三人が一緒に暮らせる家を見に行くように言われていた。彼らは良く知らないが、後見人になった黒田は、世間では有名な資産家らしい。どうしてそんな人間が今頃になって彼らの後見人になってくれたのかは、彼らも知らされていない。ただ、死んだ両親の友人だっただけしか聞いていない。

駅の繁華街は思いのほか混雑していて、行き交う人々の熱もあつてか、酷く暑い。いい加減、どこか涼しいところへ入りたくなってきた頃に、海が足を止めた。

「どうした」

二三步先まで歩いてしまった陸と空が、振り返り同時に聞いた。

「ここじゃないか？ 目的地」

左を向いた海の視線の先にはこう書かれていた。

『澤田不動産』

「ああ、ここだ。ここ」

三人は不動産屋に足を踏み入れた。

扉を開けた瞬間、クーラーの冷気が三人の身体を包んだ。

「おー、涼しい」

「ちよつと寒い位だな」

「いや、極楽極楽」

そう三人三様に口を開く。

小さな部屋の中に、入り口に面する様におかれたカウンターがある。その向こう側に座る三十代中頃の男性が、驚いた様に三人の少年を見ていた。

「あの、安倍と申します。僕らの後見人の黒田から話がいっているのですが」

空が男性に向かって声をかけた。

スーツ姿の男性は、三人の顔を凝視しながらゆっくりと立ち上がる。

「あ、ああ。お話は伺っています。お部屋のご見学ですよ。ええ、

聞いていますよ」

男性はそう言って、カウンターから出てきた。少年達の前へ来ると、真ん中に立っていた陸に名刺を手渡した。

「澤田武弘と申します。一つ目のお部屋はここから車で十分くらいです。いやあ、それにしても驚いたな。ご兄弟とは聞いていましたが、まさか三つ子さんだとは……」

男がいや、驚きましたと繰り返す。

三人はそれを聞き流した。こういう反応には慣れている。彼らを見る初対面の人々は大概同じような反応を示すからだ。

四人は車体に澤田不動産と書かれた車に乗り込んで、一つ目の部屋に向かった。

信号が赤に変わり、車を停車させてから、澤田は三人の少年に話かけた。

「黒田さんには、君達三人が気に入るような部屋を用意するように言われましたよ。今から行く部屋は五年ほど前に出来たマンションで、外観はとても綺麗です」

「そうですか」

澤田の言葉に反応したのは、隣に座る空だった。後ろの席に座っている陸と海はなにやら小声でこそこそと話している。そのためか、こちらの言うことは全く耳に入っていないようだった。

彼らの後見人と名乗る黒田からはかなりの額の予算を提示されている。それに部屋を選ぶのはこの子ども達だ。彼らの機嫌を損ねるわけにはいかない。この子ども達は澤田にとって良い力モになりそうだった。澤田は気を取り直したように、今度は空に向かって口を開いた。

「立ち入ったことを聞くようだけど。君たちと黒田さんは親戚か何かかな」

これは純粹に興味を持つての問いだつた。黒田といえば、この辺りでは有名な資産家で、古い家柄の家系だ。警察官僚を多く出している事でも、有名だつた。

「いえ。血のつながりはありません。僕らの亡くなつた両親と、友人關係に合つたと聞いてます。それで僕らの後見人に」

「ああ、それは、悪いことを聞いたね」

「いえ、事実ですから」

その返事に、澤田は助手席に座る、唯一眼鏡をかけている少年を盗み見る。

黒髪を短く切り、眼鏡の奥の大きな二重の瞳は今まっすぐ前を向いていた。

不意に眼鏡の奥の瞳がこちらを向いた。

「あの、青ですけど」

「ああ、すみません」

そう言つて、澤田は視線を前に戻し車を発車させた。

無言のまま、車は目的地のマンションにたどり着いた。

車をマンション前の路肩に駐車し、四人はマンションの中に入る。大きなマンションだった。茶色いレンガ風の壁。オートロックの玄関を通つて、四人は三階までエレベーターを使って上がった。エレベーターを降りて右すぐの部屋。三 一号室のドアを澤田が開けた。暑い空気がこちらに流れてくる。

三人の少年は、澤田の後ろから部屋を覗きこんだ。

玄関の奥は短い廊下だった。左右と正面にドアがある。

澤田が横へ避けて、三人を先に部屋へ通した。

「窓閉めきつてるので、暑いですが、少し我慢してください」
「はい」と、海が返事をする。

靴を脱いで、四人は廊下に入った。一番初めに廊下に入った

海が急に顔を曇らせた。

「澤田さん。何かこの部屋、臭くないですか」

澤田は海 of 言葉に顔を顰めた。鼻を動かして辺りの臭いを嗅ぐ動作をする。

「何も、臭いませんが」

「トイレの臭いじゃないの」

そう言つて、陸が玄関から一番近い場所にあるドアを開ける。

そこは洋式便所だった。綺麗に掃除されている。臭いの元になるようなモノは何もなかった。むしろ、芳香剤の良い香りがする。

「そんな臭いじゃないよ。何か血のような臭い……」

「ふーん。誰か生理なんじゃないの」

陸の台詞に、明らかに顔を赤らめたのは空だった。

「何言い出すんだよ。ここには男しくないんだから、あるわけないだろう」

「冗談に決まつてるじゃん。空つてばウブなんだから。それとも本当に生理なの？」

真剣な表情で聞かれ、空は言い返そうとしたようだ。だが、陸の真剣な表情の中にからかうような色を見てとったのか、口を閉ざした。その隙に海が声を上げる。

「陸のいうアレとかじゃなくて、そうじゃなくて、もっとこう大量の血が流れ出したような感じの臭いだよ」

「澤田さん。ここで誰か怪我でもしました？」

陸は海 of 言葉に頷いて、澤田に問いかけた。

澤田は笑顔を少し引きつらせて、少年達を見ている。

「き、気のせいでしょう、誰も怪我なんてしていませんよ。さあ、あの正面のドアを開けてください。あそこがリビングになります」

澤田は納得していないような表情の三人に笑顔を向けた。三人の少年の背中を押して、リビングに入る。

そこは家具が一つもないフローリングの部屋だった。正面にベランダへと続く窓がある、とても広いリビングだった。

「ここは近くに大きなショッピングセンターもあるし、駅も歩いて十分程度で行けます。静かで治安のいい場所です。いい物件ですよ。相場よりずっとお安く納めてますしね」

澤田は笑顔で説明する。

それに頷いて、陸は空を呼んだ。

「空。この部屋どう？」

空はなぜか眼鏡を外すと、部屋を見回した。

そして、部屋の中央からやや右よりの場所を指差した。

「そこにいる」

「あ、やつぱり？　そこが一番臭かったんだよね」

くんくんと鼻を動かしていた海が、納得いったというように頷いた。

「澤田さん。ここで若い女性が刺されて死んでいるでしょう」

空が言った。空の目は、まっすぐ指差した場所を見つめている。

「ま、まさか。変なことおっしやらないで下さいよ。そこに幽霊がいるなんていいませんよね。幽霊なんているわけじゃないじゃないですか」

そう言いながら澤田は視線を泳がせた。

何故知っている。

確かに二年前、この部屋で殺人事件は起こっていた。夫婦で住んでいた前の住人は、仲たがいを起こして妻が旦那に殺された。刃物で滅多刺しだったという。

そう、ちょうど空が指差していた場所の辺りで、血まみれの妻が発見されている。

澤田はそう思ったことを悟られないように、笑顔を作り直して口を開こうとした。だが口を開くのは、空の方が早かった。

「幽霊かどうかは知らないけど、髪の毛の長い女の人が、血まみれでこっちを見ているよ」

「俺はこの部屋、血のにおいしか感じない。気持ち悪い」

海は大げさに顔を顰める。澤田には海の言う血の臭いは感じない。

感じるはずはないのだ。二年も前に死んだ女性の血の臭いなど、感じてたまるか。

「ここに住んでた奥さんが、旦那さんに刃物で滅多刺しにされて殺されたんだってさ」

「ど、どうしてそれを」

驚いて澤田は陸を見た。そして、澤田は自分が肯定する意味の言葉を口にしたことに気づく。あわてて口に手をやったが、もう遅い。陸は口元に軽く笑みを浮かべた。

「だって澤田さん。さっき、そう考えたでしょう」

「ええ？」

陸の言葉に澤田の胸が大きな音を立てる。

「俺、人より耳が良いんです」

陸はにっこりと微笑んだ。別に何でもないことのように、その言葉はあっさりとした響を持っていた。

「……」

澤田は陸の言葉に、気味の悪さを覚えた。

俺の思っていることが聞えたってことなのか？ そう思っ喉を鳴らす。

「俺この部屋嫌だな。早く出ようよ。血なまぐさい臭いって好きじゃないもん。鼻曲がりそう」

海がそう言っ鼻をつまめば、空もそれに呼応するように頷く。

「僕も、毎日血まみれの女の人と食事なんてしたくない」

その言葉を受けて、陸は澤田を見やった。

「二人がそう言ってるんで、澤田さん。この部屋は却下。次の場所ヨロシク」

そう言っ陸は海と空を伴ってさっさと部屋を出て行く。

澤田は慌てて後を追った。

車に戻った澤田は、居心地悪く思いながら、車を発進させた。

次の物件へ向かいながら考える。

子どもだと思って、見くびりすぎていたな。こいつら、きっと事前にあの場所で起こったことを調べていやがったんだ。黒田にでも部屋の場所を聞いていたに違いない。全く最近のガキは油断ならぬいな。俺の考えていたことが聞えたなんて、ふざけたことぬかしやがって。

次の場所は首吊り自殺した人がいたけれど、十年も前の話だし大丈夫だろう。中々買い手のつかなかった物件だ。その部屋を高額で売れるチャンス。絶対逃してたまるものか。

そこまで考えた時だった。澤田は後ろから声を掛けられた。

「澤田さん」

「は、はい？」

澤田は思わず身体を震わせて、声を上げた。声が若干上ずっている。そろそろと、澤田はバックミラー越しに、制服を着た陸を見る。「何でしょう。陸君」

「次はまともな場所にしてくださいね」

「あ、ええ。スイマセン。次は大丈夫ですから」

ああ、驚いた。まさかとは思うが、俺の今考えていた事が聞えたのかと思った。

澤田は胸を撫で下ろした。ありえない、それは絶対にありえない。そんな事が出来る人間なんているわけがないじゃないか。

澤田がそう考えて、アクセルを踏む足に力を入れた時、陸の声が耳を打った。

「あ、それから澤田さん。俺たち別に澤田さんのことからかっている訳でも、ふざけてる訳でも無いですよ。それと、首吊り自殺した人がある部屋は嫌だな。空も見たくないと思うし」

その言葉に、澤田は思わず手を滑らせた。

車体が大きく左右に揺れる。澤田は慌ててハンドルを持ち直した。対向車線を走っていた車にクラクションを鳴らされる。

「うわあ、危ないなあ。澤田さん」

海が抗議の声を上げた。

「す、すみません」

慌てて謝った澤田は、クーラーで冷えた車内の中、一人額に汗を浮かべながら声を絞り出した。

「あの、陸君。君、本当に私の考えていることが……」

分かるのかと聞こうとして、バックミラー越しに見た陸の顔に、澤田は不敵な笑みを見つけた。

「さあ、どうでしょうね。さっきも言いましたけど、俺はただ人より少し耳が良いだけです。そしてそれと同じように、空は人より少し目が良くて、海は人より少し鼻が利くんです。それだけなんです」

「……」

何だか恐ろしくなつて澤田は息を飲んだ。ハンドルをきつく握る。ハンドルを握る手が汗ばんでいた。

澤田はもう、何も言わなかった。

次に予定していた物件をやめて、別の場所へと、進路を変えた。

第二話 不動産屋のある日（後書き）

（後書き）

ここまで読んでいただき本当にありがとうございました。

今回のお話はですね、実は、数年前に長編として書き出したものの途中で面倒くさくなつてやめてしまったお話であります。（こんなお話がパソコンにいっぱい眠っております（泣））

ですが、このお話は気に入っております、見つけたので、今回投稿させていただきます。

若干自作小説の三兄弟の事件簿と被っておりますが、関係はありません。でも、被りすぎですね。まず、主人公が三つ子であること。名前がそら（空）とくう（空）海はそのまんま読みも一緒ですから私、どうも一文字で書ける名前が好きなようです。

今回の三つ子ちゃんたちは、三兄弟の事件簿のキャラと違い、同じ顔です。名前は自衛隊の陸海空からつけました。

そういえば、涼風爽快も三つ子が出てきますね。今、四作の小説を投稿中ですが、そのうち三つに三つ子が出演していますね。私どうやら、兄弟モノが好きなようです（笑）

ジャンルは直感でつけても良いとのことでしたので、コメディにしてみました。

なので、あまり、ジャンルのことでつまらないで下さいね。

では、この辺で。

このお話が、すこしでもお気に召していただけのことを祈りつつ。

愛田 美月でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591e/>

ある日の話

2010年10月8日15時12分発行